

指導資料



鹿児島県総合教育センター

校内研修 第1号

-小,中,高,盲・聾・養護学校対象-

平成15年11月発行

教育実践に生きる校内研修の進め方

今日、学校では、特色ある教育活動を展開し、児童・生徒に生きる力をはぐくむ教育を実現するために、教員一人一人の資質向上を図ることが求められている。その実現のための効果のある手だての一つとして、校内研修の充実が挙げられる。しかし、一方では、校内研修が形式的で形骸化される傾向にあるとの見方もあり、教員が自ら進んで課題解決に取り組もうとする姿や、主体的で計画的な校内研修の運営などに課題を抱える学校もある。

そこで、本稿ではこれまで以上にそれぞれの教員が積極的に校内研修にかかわり、日常の教育実践に生きる校内研修の進め方を述べる。

1 校内研修を進めるに当たって

校内研修は、学校の教育課題の解決に迫るための共同研究の場であり、そのことを通して教員一人一人の資質向上が図られる。

各学校において校内研修が有効に機能するためには、下記の2点を中心に全員で共通理解を図る必要がある。

(1) 自己課題の意識化

校内研修が、学校教育目標の具現化に向け機能化するためには、教職員一人

一人が学校全体の教育課題を自己の課題として認識することが大切である。

(2) 研究授業を通じた校内研修の推進

研究授業は、日々の教育実践に生かすことのできる研修として位置付けられる。研究授業を通じた校内研修を行うことで、以下のような効果が期待できる。

ア 教員の指導技術を高めることができる。

イ 共通の課題をもって解決に取り組むことができる。

ウ 経験年数の違いを超え、相互の力を引き出すことができる。

エ 一つの研究の成果を全教職員に波及することができる。

以上のことを共通理解し、実践することで、校内研修を充実させ、日々の教育実践に生きる研修の実現につなげることができる。

2 実践に生きる校内研修

校内研修を日々の教育活動に生かすためには、これまでの研修の進め方や成果を振り返り、その改善の方策を次のような視点

に立って検討してみる必要がある。

(1) マネジメント・サイクルの導入

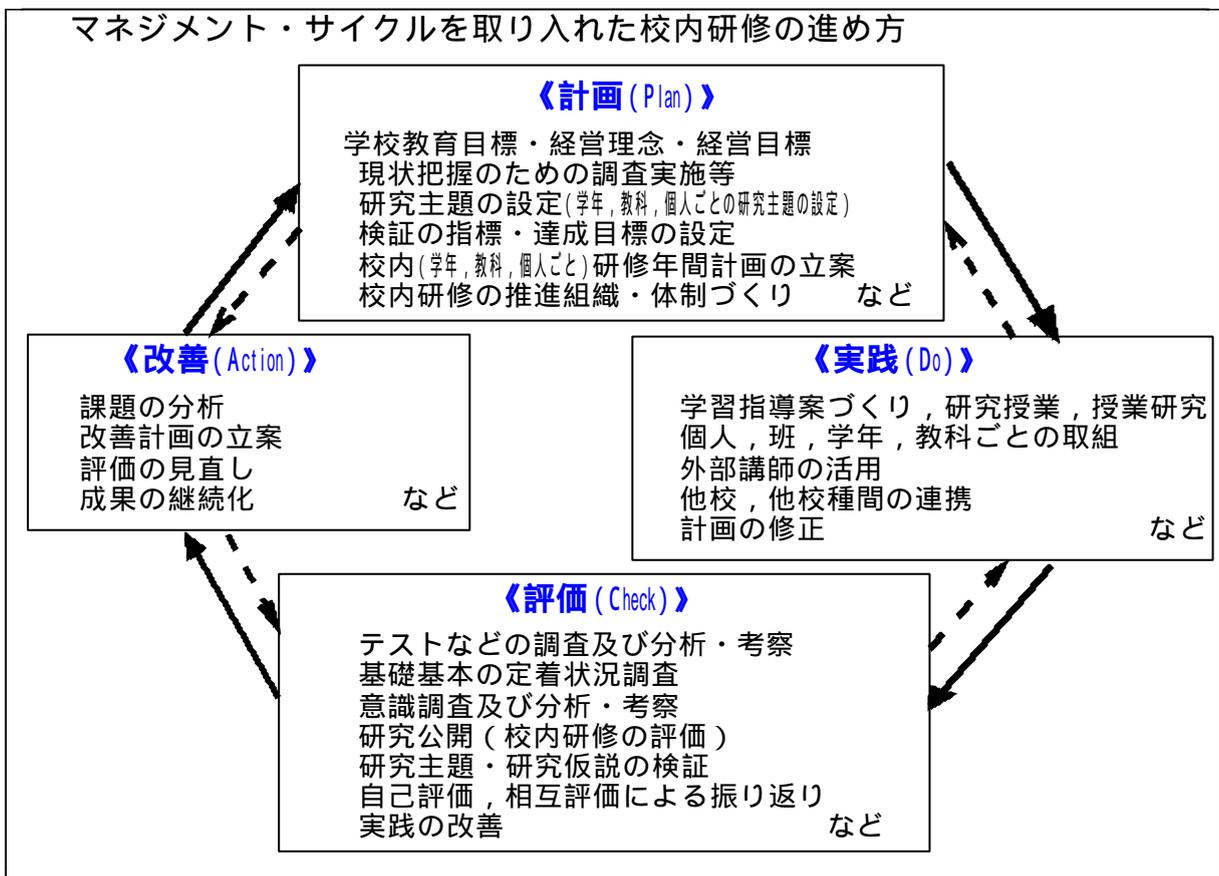
次年度の校内研修の改善の視点を明確にするため、マネジメント・サイクルを取り入れた計画を立案し、計画の中に具体的な達成目標や検証方法などを設定する。

マネジメント・サイクルを取り入れるとは、校内研修の目標・計画(Plan)の設定から、確実な実践(D)、客観的な分析に基づく評価(Check)、改善(Action)のサイ

クルに従って、これまで行ってきた校内研修の進め方を見直すことである。

また、全体の研究主題を受け、学年や教科、個人ごとに研究主題設けたものを副主題として研究を進める。

そして、ポイントごとにフィードバック、フィードフォワードを行って見直し、内容が更に具体的になるように改善・修正していくことで、より日常の教育実践に生きる研修が推進できるようになる。



(2) 研究主題の設定

校内研修の研究は、教職員一人一人の児童・生徒の成長への思いと学校の教育課題が重なり合うもので、教職員が共に実践し、追究することで児童・生

徒の変容と教育課題改善に結び付くものであることが重要である。

そして、全教職員が校内研修の課題に関連する個々の研究主題を設定し、それにアプローチするための具体的達成

目標を解決できるような、主題を含む研究主題を工夫することが、実践に生きる研修につながる。

主題設定の手順，手続きを大切に，全教職員の考えや意見を可能な限り反映させる。したがって共通性のある主題を校内研修の主題として，共通理解を図るとともに，グループ協議の場を設定するなど，計画・立案の段階から全教職員にかかわらせることが重要である。

教育活動でとらえた疑問，悩みなどについて自由に意見を交換する場を設定する。そして，出された意見を整理し，緊急性や必要性を検討の上，研究主題設定に生かすようにする。

研究主題を設定する場合は，学校教育目標や重点目標との関連を十分に検討する。

(3) 検証可能な達成目標(研究仮説)の設定

研究主題の設定と同時に，教科の研究主題や研究内容，検証の指標及び達成目標などを設定する必要がある。その際，何がどのような状態になったときに，目標が達成されたと判断するのかを明確にして研究に取り組むことが肝要である。

(4) 校内研修の進捗状況の把握

全教職員が主体性をもち，日々の実践に生きる校内研修を実現するためには，校内研修の経過報告や中間まとめを行い，教職員一人一人が常に研究全体の進捗状況などを把握できるシステムを作ることが大切である。

(5) 研究授業に臨む際の視点

研究授業を授業改善に結び付けるためには，マネジメント・サイクルの視点を導入する。その際，参加者全員が授業のねらいや指導方法，評価の時期と方法，学習の遅れがちな児童生徒への手だて，学習の理解が早く発展的な内容を学ぶことが必要になる児童生徒への対応の仕方などを共通理解しておく。これらの情報は，担当教科以外の教育活動で児童生徒がどのように学習にかかわっているかを知ることから，生徒指導の面からも大変有効である。

マネジメント・サイクルの視点に立った授業改善

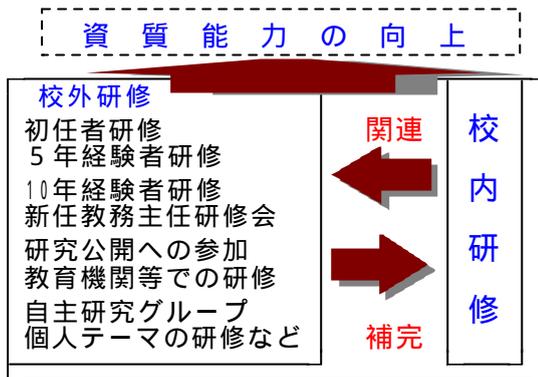
(P) 計 画	1 事前準備では， 指導案事前検討会において授業者の提案意図を理解し共通の視点をもって参加する。 学習指導案の内容や工夫を整理して参観の準備に取り組む。 前回の研究授業での課題を解決するための具体策を確認する。
(D) 実 践	2 授業参観では， 児童生徒の反応に十分留意して記録する。 ビデオ等の再現性のある記録を残す工夫をする。 あらかじめ観察する観点を検討し，追跡する児童生徒を決め，担当を分担し記録を取るなど，指導法研究に生かす情報の収集を工夫する。 計画の修正や調整を検討する。
(C) 評 価	3 授業研究では， 協議の視点に基づき，記録を基に積極的に協議する。 少人数による協議，班別など意見を出しやすい形態を工夫する。 自己評価や相互評価を活用して実践の改善を行う。
(A) 改 善	4 研修後は， 授業研究等で出された改善策を次の授業で取り入れる。 授業研究で得たこと，改善策や具体的な方策などは，自分一人のものせず，校内，校外の研究会等でも意見を交換する。 研究の成果が継続して実践されるよう具体策を工夫する。

3 校内研修と校外研修などのかかわり

校外研修や個人の研修と連携した校内研修を設定すれば，教職員の資質の向上が一

層期待できる。また、総合教育センターの短期研修や他校の研究公開に参加する際は、自校の研究主題に関係の深い内容を選択すること、研修で得た成果を発表することなども校内研修を充実させる。

各研修と校内研修のかかわり



そこで、校内研修と校外研修を有機的に

4 年間研修計画の例（A小学校）

月	研究内容等	全体会	班会	教科部会	備考
4	全体(教科)の研究主題の修正, 研究推進基本計画の修正 個人の研修計画の立案と検証の指標・達成目標の設定 外部講師の招聘, 研修会参加希望集約と年間計画への位置付け				研修組織・体制の確認
5	研究の視点, 研修計画の具体化 実態把握の調査・検査の実施, 研究授業の位置付け 実践の開始と視点に基づく研究, 第1回研究授業と授業研究				人権同和教育の研修
6	実態把握の調査・検査の分析・考察 第2回研究授業と授業研究				心肺蘇生法, 水難事故に関する研修
7	班別, 教科別の実践報告, 研究報告, 1学期のまとめ 子どもたちの自己評価や相互評価の分析, 研修計画の修正				マルチメディア研修
8	2学期の計画の修正, いろいろな実技研修 仮説や視点に基づく研究, 授業準備や実践準備				実技研修

5 まとめ

年間を通じて各研修をマネジメント・サイクルの視点で改善することは、教職員一人一人の資質向上と意欲の高揚につながっていく。

特に、研究授業や授業研究を通じた実践的な校内研修の継続的な実施により、教職

関連・補完させるための改善点を次のようにまとめた。

教育目標の具現化に向けて個人研修と校内研修との関連を図る。

校外研修の成果を校内研修など共有する場を設定するとともに、校内研修の改善に向けた方策の参考にする。

校内研修を通して教員相互に助言や援助をし、研修意欲の醸成と多様な見方と考え方の育成に努める。

校内研修の場で学び得た成果を生かしながら、児童生徒を変容させるために学校としての具体策を積極的に実践していく。

員一人一人の資質を高め、児童生徒に「確かな学力」をはじめとする生きる力を高めるよう校内研修を改善・充実させることが重要である。

【参考文献】

広島県教育委員会『授業改善のための校内研修ハンドブック』平成15年3月

(教育経営研修室)